

共同利用・共同研究課題「チベット・ヒマラヤ牧畜文化論の構築—民俗語彙の体系的比較にもとづいて—」(2022年度第1回研究会)

2022年5月22日(日曜日)13時より19時、ハイブリッド開催

本共同研究課題最終年度、第1回目となる研究会では、ゲストによる発表3件と、発表に関する質疑応答・情報提供、今後の共同研究の活動に関する全体討論を行った。当日のプログラムは以下のものである。

#### 発表1

1. 木村李花子(東京農業大学)「インドの遊牧民・移牧民とウマ属動物」  
質疑応答・情報提供

#### 発表2

2. ガザンジェ(日本学術振興会, 東洋文庫)「チベットの鳥葬について」  
質疑応答・情報提供

#### 発表3

3. 上村明(東京外国語大学大学院総合国際学研究院研究員)「モンゴル国西部の牧畜—環境・移動・家畜管理・日帰り放牧—」  
質疑応答・情報提供

#### 全体討論

木村発表では、インドの遊牧民・移牧民とウマ属動物についてのプロジェクトの成果が紹介された。最初に馬、(半)野生馬、ロバ、野生ロバについて説明され、インドの3地点におけるこれらの家畜や種間雑種の生息状況が述べられた。また、種間雑種には荷物を運べる体力や懐きにくいという性質、さらに希少価値があるため、高値で取引されるという例が示された。また、放生ヤクをいったん野生化し、ホルモン量を増やして種付けに使うという事例も報告された。

ガザンジェ発表では、チベットの鳥葬の現状に関するフィールドワークの事例が紹介された。東北チベットのシヨンボンシの村の鳥葬場、そして、中央チベットのものでディクン寺、セラ寺、ガンデン寺にある地域共通の鳥葬場である。これらの各寺院の鳥葬場では、遺体の切り方に違いがあることが示された。この切り方は鳥葬場ごとに鳥葬師から鳥葬師へと直伝される。最後に鳥葬に関するチベット人の考え方として、「捨身飼虎」に代表される、自らの体を他の動物に与える布施を関連づけられることや、ゾロアスター教の鳥葬との関連

に触れた。質疑では、鳥葬を「捨身飼虎」と結びつける説は後付けなのではないかという指摘や、犬に死体を与えた事例などから、鳥だけにこだわらない視点が必要なのではないか、という意見が出た。遺体の切り方については、広い地域で共有されるものではなく、鳥葬場ごとに伝わるものであることがわかった。

上村発表では、チベット・ヒマラヤ地域の牧畜との比較のために、モンゴル（特に西部）における牧畜について生態、牧畜形態、移動、人間集団などについて人類学的解説が行われた。質疑では、屠畜方法における、チベット・ヒマラヤ地域との違いについて議論が行われた。頭や延髄を斧でかちわるモンゴルの屠畜に対して、チベットでは窒息法が広くとられており、これらが肉の味によるものなのか、エスニシティによるものなのかが議論された。

全体討論では、当日の議論の総括を行い、意見交換をした後、今年度の計画を話し合った。

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.